

[制作記録]

展覧会報告「漆芸の未来を拓く－大学交流2024－」

Exhibition Report:

Paving the Way for the Future of Lacquer Art – University Exchange 2024

青木 千絵

AOKI Chie

はじめに

本稿は、令和6年度に採択された漆芸作品展覧会「漆芸の未来を拓く－大学交流展2024－」の実践報告である。

1. 背景

能登半島地震で被災した漆の里・輪島は極めて困難な状況にあり、石川県輪島漆芸美術館が15回にわたって開催してきた「生新の時－漆芸の未来を拓く－」展も今年度は中止となった。この展覧会は、漆芸を学ぶ学生たちが卒業・修了制作を一堂に展示し、異なる環境で学んだ学生同士が互いのアプローチやアイデアに触れ、刺激を与え合う貴重な機会であった。この状況を受け、これまで参加してきた金沢美術工芸大学、金沢学院大学、富山大学、東京藝術大学、京都市立芸術大学、東北芸術工科大学、広島市立大学、沖縄県立芸術大学の8大学が結集し、「漆芸の未来を拓く－大学交流2024－」展を本学で開催するに至った。

2. 目的

本展覧会の目的は二つある。一つ目は、これまで「生新の時－漆芸の未来を拓く－」展を開催してきた石川県輪島漆芸美術館に敬意を表し、その趣旨の一部を受け継ぎ、漆芸を学ぶ学生たちの発表の場を確保し、これを絶やすことなく次年度へ引き継ぐこ

とである。二つ目は、漆芸教育を有する大学間の交流を促進し、鑑賞者の漆芸や工芸に対する関心を高め、漆芸領域の未来への発展に寄与することである。

3. 概要

本展覧会では、漆工芸を学んだ各大学の2023年（令和5年）3月卒業および大学院修了者のうち、有志18名による作品展示を行った（出品作品は、事情により卒業制作に限定していない）。また、会場内のモニターでは、8大学すべての卒業生・修了生48名の作品を画像で展示した。展示作品には、乾漆、螺鈿、卵殻、蒔絵など、様々な技法が用いられ、各大学の特色が反映された多様な表現が集まった。会期中には、石川県立輪島漆芸美術館の山崎剛館長の司会によるギャラリートークが開催され、約100人の鑑賞者が集まり、出品者が制作意図や技法解説、制作の裏話を語った。また、展覧会の開催時期が五芸祭と重なったことから、最初の3日間で来場者数は1000人を超え、他大学の学生や一般の方々にも漆芸の魅力を知ってもらえる有意義な機会となった。

4. 内容

会 期 令和6年5月24日（金）～5月31日（金）
〔8日間〕
会 場 金沢美術工芸大学 2号館（美術館・図書館棟）1階 アートコモンズホワイエ、レクチャーホール

時 間 10:00～17:00

イベント 出品学生による作品解説

コーディネーター 山崎剛氏

(金沢美術工芸大学教授、輪島漆芸美術館長)

主 催 展覧会「漆芸の未来を拓く－大学交流2024－」実行委員会

協 力 石川県立輪島漆芸美術館、金沢美術工芸大学、富山大学、東京藝術大学、京都市立芸術大学、東北芸術工科大学、広島市立大学、沖縄県立芸術大学

後 援 北國新聞社

出品点数 会場展示18点 モニター展示48点

印刷物 ポスター：B2 2種類 10色プリンター印刷
各20部

フライヤー：A4 両面4色 1000部

目録：A4 両面1色 200部

デザイン 松原 奈美 (富山大学修士1年生)

総来客社数 1398人

おわりに

本展覧会の開催を通じ、漆芸教育を有する大学間の連携がさらに深まったことを感じた。また、学生たちにとっても成長と学びを得る良い場となった。今後も、漆芸の発展と漆芸を学ぶ学生たちの成長を支援する取り組みを継続していきたい。被災地である輪島が従来の姿に戻り、再び漆芸の未来への希望を広げる場となることを願ってやまない。

附記

本稿は、令和6年度奨励研究の成果の一部である。本研究の詳細については、「漆芸の未来を拓く－大学交流2024－記録集」にて発行されている。

(あおき・ちえ 工芸／漆・木工)

(2024年10月25日 受理)



フライヤー 表面



フライヤー 裏面



会場の展示風景

入口では、3種類のポスターを設置し、来場者を誘導した。会場に入ると、ホワイエには大型の漆作品を中心に展示をし、会場内のモニターでは、8大学すべての卒業生・修了生48名の作品を画像で展示していた。



石川県立輪島漆芸美術館の山崎剛館長司会によるギャラリートークが開催され、約100人の鑑賞者が集まり出品者が制作意図や技法、制作の裏話に耳を傾けた。

2024年5月27日(月)の掲載記事
北陸中日新聞

